



## はじめに —News-Letter 別冊版のねらい

大串 潤児

2022年2月、私たち「戦時下日本の国策紙芝居研究」（通称・紙芝居）班は、研究会発足以来の地域調査の成果を、神奈川大学評論ブックレット『国策紙芝居—地域への視点・植民地の経験』（御茶の水書房）として世に問うた。このブックレットには、調査の過程で出逢った多くの所蔵者の方々、関係諸機関からも寄稿いただき、そのことで紙芝居を研究・議論する“ひろば”を作ること私たちは意識していた。こうした地域調査によって「新規発掘」「所蔵判明」した紙芝居作品はゆうに200点をこえており、これらの整理・検討をふまえて、現在、研究班は『国策紙芝居からみる日本の戦争』勉強出版、2018年に次ぐ同書・第二集の編集作業を本格化しつつある。

同時に、これまでのいわば「偶然」による地域調査（研究班メンバーによるインターネット検索など）、情報提供にもとづく地域調査にくわえて、「紙芝居運動がさかんな地域」「炭鉱・工場地帯」「大都市部（大阪、京都、神戸など）」といった、いまだ十分に検討されていない地域の調査、つまり戦略的な地域調査も必要になってきたことも確かである。別の言い方をすれば、これまでの地域調査での蓄積をどのような方法論として練り上げ、紙芝居（史）論、ひいては戦時下大衆メディア論・戦時社会史論を豊かに、かつ刺激的に構築していくか、という課題に私たちは直面するようになったのである。

こうした研究課題をなかば受けとめつつ、2022年の初夏から私たちはかなりのハイペースで地域調査を行った。それは必ずしも多くの作品所蔵コレクションを対象にしたもののみではなかったが、新規発掘であれば1点であっても調査を行い、さらにこれまでのように刊行

された作品（日本教育画劇株式会社、大日本画劇など）のみならず、日本教育紙芝居協会地方支部や個人（子どもを含む）によって、地域独自に作成された紙芝居作品をも射程に入れたものとなった。

従来、こうした地域調査は随時、個別に『非文字資料研究センター News-Letter』で報告してきた。しかし、前掲ブックレット『国策紙芝居』をまとめてみると、バラバラに調査報告を発表するよりは、一つの“まとめ”を持つものとして地域調査を位置づけ、そこでの成果と課題を相互連関的かつ総括的に示す方が、私たち研究班の問題関心の所在や研究方法、さらに直面している課題を効果的に示すことができると考えた。ここで方法とは、すでに多くの場所で指摘してきた、①地域に視点をあてること、②植民地を視野に入れること、③戦時下の大衆メディア総体と各ジャンルの相関のなかで紙芝居をとらえること、といった論点にくわえ、紙芝居作品の読解の仕方や、実演者・観客（「場」の検討）はもとより、広く、また深く戦時下庶民心情・民衆意識の「原像」に迫ろうとする方法をも意味している。

こうした企画出版には前例がなかったが、幸い非文字資料研究センター関係各位の理解を得ることができ、この度、2022年地域調査を中心に『非文字資料研究センター News-Letter』別冊版として刊行の運びとなった。ある意味ではブックレットの続編としても位置づけるものである。

ブックレット刊行後に実施された地域調査（2021年11月～）は巻末に一覧を掲げた（NL. 48, 2022. 9は『非文字資料研究 News-Letter』での調査報告掲載号の表記である）。



岩木山